
僕の日常

Salt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の日常

【コード】

N3984Y

【作者名】

Salt

【あらすじ】

普通に普通で普通な高校生、藤田 真の学園生活を描く物語
諸事情によりタイトル変わりました

1話 後期入試の合否発表

僕、藤田真は地元の高校に向かっていた。

地名をそのまま冠した校名で、偏差値が高いわけでもないし、専門学校というわけでもない。ほとんどの人は滑り止めとして前期入試に臨む、後期で受ける人は前期で他の高校に落ちて後がないという場合が多い。

僕は前期でこの高校に落ちてさらに後期でも受けている。というのも。僕は真面目な学生とは言い難い。そもそも自主的に勉強していない、成績はぎりぎり赤点回避程度で――本当は何度か赤点になっている――、部活に取り組む事もなく帰宅部、委員会や学校行事等に携わる事もなかった。その不真面目さを払拭出来るほどの何かを持っているかという、何も無い。

そんな低成績者が滑り止めにと受けるような人達と一緒に受けて合格するはずもなく。前期で落ちた時、前期と後期の両方受ければ、熱意として受け取ってくれるかもしれない。という先生のアドバイスを受け、再び後期試験に臨んだというわけだ。

そして今日は合否の発表だ。

不思議と自信はないのに緊張はしなかった。何故か不安があったのに焦りはしなかった。むしろとなりにいる父の方が緊張と焦りで顔が引き攣っていた。

校門を抜け、人の波をかき分け、合格者の番号が載せられた掲示板を確認しようとするが。僕の視線は番号ではなく、ある人影に釘づけになった。この場には絶対にありえない人物をみつけたからだ。しかし、受験票を握りしめながら歓喜する父を抑えるうちに、その人影を見失ってしまった。

1話 後期入試の合否発表（後書き）

初めてなので出来具合に色々と不安は多いですが、そこはご容赦いただけたらと思います。

2話 そうだと思ってた

春の暖かな気候は非常に心地よいものだ。特に今日は、天気予報でも取り上げられたほど穏やかな天気だ。不意な眠気に襲われ、それに身を預けてしまった彼を、誰が咎める事が出来ようか。

ただし、今が入学式の最中でなければの話だが。

「真、起きろって」

隣に座る男子生徒に肩をゆすられ、ようやく目が覚める。

校長の話が始まったところまでは記憶があるのだが、どうやらその途中で寝てしまったようだ。

「お前、入学式から居眠りとか余裕だなあ」

「昨日遅くまで起きててね」

入学式の最中だ、もちろん話す声は他の生徒にも聞こえないような小声で顔は正面を向いたままだ。

「まさか入学式にワクワクで眠れないって歳でもないだろ？」

「そういう類の緊張感に歳はあんまり関係ないと思うけど」

寝ぐせのような天然パーマの金髪が特徴的な彼は、幼稚園以来の幼馴染で坂本達也。小学校と中学校は学区分けなので一緒になるのは必然だが、まさか高校まで同じ学校に通う事になるとは思わなかった。

というのも彼、僕と違い勉強は出来るのもっと偏差値の高い学

校を狙えたはずだが。後から聞けば「面倒だから」という理由で最も距離の近いこの学校にしたらしい。そんな考えでいいのかと何度か問い質した事もあった。

とはいえ、見知らぬ顔ばかりの新しい学校で、親友とも呼べる友人が同じ学校にいるのは心強い。

達也と話す方に意識を傾けていたため、顔を向けてはいても……向いてるだけで見てはいない。壇上からの祝辞の言葉は全く耳に入っていなかった。気付けば生徒会長の祝辞が終わった後だった。さすがに先輩の顔は覚えておかないと思っていたのに。

これで祝辞が全部終わり、次は新入生の総代が答辞を述べる番だ。

「新入生代表、前へ」

司会がそう告げると1人の女生徒が壇上へ上がった。

この学校では、入試で最も成績が良かった生徒が新入生の総代を務める事になっているらしい。その総代は僕の予想通りの人物が務めていた。

「やっぱり霧島さんか」

「僕もそうだと思ってた」

達也もやっぱりとつけただけあって予測がついていたのだろう、新入生の総代を務めていたのは中学で同級生だった霧島綾さんだった。

3話 別のところを受けたのでは？

高校の後期入試の合否を見に行った帰り、父には先に帰ってもらって僕は学校へ合格の報告をしに行った。

職員室へ行くと他にも報告に来た生徒が何人かいて、喜びを分かち合っていた。僕もそれに交じって祝ったりしていたが、やがてその中にさきほど見失った人物を見つけた。

霧島綾。成績優秀、容姿端麗と絵に描いたような美少女。成績は校内どころか全国レベルでトップクラス。その容姿はお世辞抜きで美人だ。それに加え、人当たりも良く男女問わず人気の的だ。

とそれはさておき、彼女は聞く話によるとすでに有名私立校に受かっているらしい。それがなぜこの場にいるのだろうか。友達の付き添いで等の理由も考えたが、高校での事もあったので、僕の頭には疑問符が浮かんでいた。

それに気づいたか偶然か、彼女の方から話しかけてきた。

「藤田君は合格した？」

「はい、なんとか合格出来ました」

「私も同じ高校なの、これからもよろしくね」

え？同じ高校？霧島さんが？一番ありえないと思っていた可能性が期せずして肯定された。

その言葉に同様に隠せなかったのは僕だけではなかったようだ、他の生徒も目を白黒させて霧島さんを見ていた。

「同じ高校ですか、別のところを受けたのでは？」

「そこはダメだったの、だから滑り止めで」

確証はないが恐らく嘘だろう、本当に落ちたのだとしても滑り止めとはいえあの高校では - - 学校には悪いが - - 役不足だろう。

「そうですね、希望通りとはいかなかったんですね」

「そうですね、でも行く学校に友達がいるのは嬉しいわ」

彼女はこう言うが知り合い程度の付き合いしかない。期間だけというなら小学5年の時彼女が転校してきた時からの5年間だが、特別親しいわけではない。これも彼女の人当たりの良さを考えればありえる台詞か。

「そういえばさっきの返答がまだでしたね、こちらこそよろしくお願ひします」

「ええ、よろしくね」

そう言うと彼女は笑顔で職員室へ入って行った。

その後教師達の驚きの声があがったのは今でもよく覚えている。

3話 別のところを受けたのでは？（後書き）

当初の予定では1週間毎の更新を予定しておりましたが、友人がとつと先を見せるとしつこいので、書きあがった時点で投稿する事にしました。

4話 何歳ですか？

入学式が終わったあと、新入生はクラス毎に教室へ集められた。顔合わせと担任の先生の紹介を兼ねてのものらしい。クラスは全部で6組、僕はそのうちの3組になった。

クラス分けは出身校別にわけ、そこから人数を調整しているようで。教室に入ると見知った顔が見えた。

「あつ来たわね達也、真」

「おう、おはよ」

「おはよう」

その長い髪をポーにテールで纏めた彼女は、達也と同じく幼稚園以来の幼馴染で中条貴理華、つり目をしていかにも気が強そうだが、ほんとに気が強い。僕ほど切羽詰まっていはいなかったとは思うが、同じく成績的な意味でこの高校に決めた達だ。ただ僕と違って運動神経抜群という面をもつが。

「この腐れ縁もまた3年続く事になったわね」

「まあそういうなって」

「僕が成績悪くて中退したら1年足らずで消えるけど？」

「え？いや、それは」

「冗談なんだけど真に受けないでくれるかな」

3人とも事前に打ち合わせたわけではないが自然と同じ学校になった。腐れとはいえ縁を感じずにはいられない。親には――達也と貴理華の親も含め――ずっとそのままやってそうだよなどと言われるが、本当に一生この関係が続くとは思ってない。それでもこの縁は切れそうにないなと感じているのも事実だった。

出身校別になるので当然霧島さんも同じクラスだ、その美貌はすでに人だかりが出来ている。他にも同じ中学の生徒もいたが。苗字くらいはわかるんだけど程度の付き合いしかなかった人ばかりで軽い挨拶程度しか出来なかった。

色々話しているうちに教師がやってきた。霧島さんの周りにいた生徒があわてて席に着く。他のクラスの生徒も結構いたのか教室から出ていく人影も多い。

全員が席に着いたのを確認すると教師は出席を取り始めた。

「小さくない？」

誰かがそんな事を漏らした。

僕も同じ事を思ったが。

見ようによつては――教師である時点でありえないが――中学生に見えなくもない気がする。身長だけでなく、その幼気な顔もその要因のひとつだろう。学校指定の制服を着せたらなんの違和感もなく溶け込めそうだ。皆も同じような事を考えているのか、出席を取るその姿をまじまじとみつめている。その視線に気づいてないのか無視しているのか、先生は見向きもしない。

出席確認は終了し出席簿を閉じると、その教師は顔を上げて話し始めた。

「まずは皆さんご入学おめでとございます、私はこのクラスの担任になる佐伯遥です、卒業までの3年間一緒なのでよろしくおねが

いします、授業等の事に関しては追々話すとして、何か聞きたい事とかありますか？」

見た目に似合わず、教師らしく――教師だが――振る舞うその姿に違和感を覚えずにはいられなかった。特に質問もなく――出来なかったが正しいかもしれない――、それではまたあしたと締められ下校となった。

とりあえず誰も「何歳ですか？」などの質問をしなかったクラスメイト達に合格点をあげたい。

5話 母さん達によるしく

今日は入学式だけだったので午前中だけで終了した。
帰った後は、一応は入学祝いという事で父と妹ともに近所のレス
トランに来ていた。

「真、学校はどうだった？」

「まだなんとも言えないかな、まあ達也と貴理華も一緒のクラスだ
し不安はないかな」

「おにいちゃん達って本当に仲いいねえ」

「別に仲がいいから同じクラスなわけじゃないからね」

僕の向かいに座る壮年の男性が僕の父の優樹、隣に座っている明
るめの茶髪に蒼い瞳と、実の兄妹である事を疑われるような妹のほ
のか。父はイギリスに本社を置く会社の日本支社の社員で、妹は今
年中学3年生だ。

「父さんはまたイギリスに？」

「悪いが今夜にはもう発たないといけない、またしばらく家を空け
てしまおうが頼むな」

「そっか、向こうでも頑張ってるね」

父は支社と本社を頻繁に行き来していて、1週間や2週間くらい
家を空けるのは珍しくない。だがこの事に僕もほのかも不満はない。

というにも藤田家にはやや特殊な事情がある。

この場に母はいないが我が家は父子家庭ではない。父と母に3人兄妹の5人家族だ。母は下の妹と英国に暮らしているのだが、母が本社に勤務しているのだからなかなか英国を離れられない。僕らが英国に移住する手もあるのだが。日本で育った僕とほのかのために、父が日本と英国を往復し続けるという無理をしてくれているのだ。日本と英国には約9時間の時差がある。何度も往復するうちに父が体調を崩したのも1度や2度ではない、それでも僕らの事を考えている父に感謝こそすれ不満なんて抱くはずもなかった。

ちなみに父は日本人で母はイギリス人で国際結婚、息子である僕はハーフとなるわけだが、母から継いだ血にイギリス人らしい容姿は含まれていなかったようで、よく探せばイギリス人の血が垣間見えるかもしれないが、外見は日本人そのものである、逆に妹達は日本人らしさが薄めだ。

食事を終え、家に帰るとすぐに父を送る事になった。どうやら僕の入学式に無理矢理スケジュールを合わせてくれたようだ。

「次帰国するときはまた連絡入れるからな」

「きをつけてね」

「母さん達によろしく」

父を見送りを終え家に入るとほのかが少しだけ泣きそうになっている。以前に比べれば笑顔で見送る余裕が出来たくらいだが、それでもさびしがりなほのかには辛いのだろう。

またしばらくは僕とほのかの2人だけになる。

藤田家の長男として、守る者として、僕は改めて気持ちを入れ替えた。

5話 母さん達によるしく(後書き)

ここからお家の事情編、というか妹編です。

6話 え？

父を見送ったあとはいつも通り2人で手分けして家事を片づける。我が家では洗濯はほのかが、掃除は2人で分担、他の家事は全て僕がする事になっている。

ちなみに父は家事スキルが低いので帰国中も2人であるのが当たり前になっている。

食事の支度は僕の仕事だ。リビングの掃除を終えたあと、夕飯を支度を整える。最近慣れもあつて色々レパートリーも増えてきた。とはいっても腕に自信はないので出来に関しては不安があるのだが、いつもほのかは美味しいと言ってくれる。嬉しい限りだ。

「いただきます」

「うん、おいしい」

「それはよかった」

見送つてからずっと僕の前では笑顔を保っていたが、無理をしているのはすぐにわかった。伊達に何年も兄をやつてない。

父が本社と行き来するようになったのは今からちょうど4年前、僕が小学6年生になった頃で、その頃は今ほど頻繁ではなかったが1〜2カ月に1週間くらいのペースで家を空けていた。

最近はこのように笑顔で送り出しているが、昔は大変だった。行くと決まれば拗ねて口もきかなくなり、いざ父が家を出ればその日の夜までずっと大泣きで眠るまでなだめていた。

さびしがり屋なほのかが父と離れたくないのはよくわかる、だが父の気持ちを無下にもできない、結局感情を抑えきれず、ああなつてしまうのだろう。

結局口数の減ったほのかに合わせる形となり、いつもより静かな食事終える。ほのかには早めに寝るように言っておいた。普段通りなら朝には気持ちも落ち着いているだろう。

夕飯に使った食器を片づけ、風呂にも入りあとは寝るだけとなったが、今すぐ寝るには時間が早い、適当に本でも読んで時間潰そうかと考えていたら…

携帯電話の突然のアラーム。これは通話の着信音か、画面を見ると藤田優樹の文字。

「はい、父さん」

「夜遅くに悪いな、ちょっと真剣な話があるんだが」

父は割と軽そうな口調で話すのが特徴で、その口調のせいで重要な話でも軽視してしまいがちになってしまう。

だが今話している父の声はなんとなく重そうな雰囲気を感じ取れる、電話越しだからというわけでもない。今までにこの重さを感じたのは、母さんと離れて暮らすと決めた時、家を空けるようになる と話した時、いずれも家族にとって重要になる話をする時だけだ。今回もそうなのだろうか。

「色々面倒な事になってしまっただけ、いつもより長くイギリスに滞在することになりそうなんだ」

「今回はどのくらいかかりそうなの？」

別に珍しい事じゃない。以前も予定よりかかりそうだとかで1週間くらい帰国が長引いた事もある。

だが少し遅れるくらいならわざわざこんな話し方はしない。それほどまでに予定が変わったのだろうか。

「今の予定のままだと次帰るのは7月始めくらいになりそうなんだ」

「え？7月……？」

7話 シスコン……

「ほのかにも伝えておいてくれ」

結局昨日はその頼みにろくな返事を返せないまま通話を終えてしまった。父の乗る便の時間が来てしまったからだ。

非常に頭の痛い問題だ、正直なところ僕はすでに父が1〜2カ月家を空ける事もあるだろうとは思ってたのでそこまで驚かなかつたのだが、問題なのはこの事をどうやってほのかに伝えるかだ。

今回の予定では10日間程で帰る予定で、いつもと大して変わらない日程だ。それでもあの落ち込み様のほのかに、いきなり3カ月も戻らないなんて言ったらどうなるか。

よほど悩ましい顔をしていたのかほのかに感づかれてしまった。

「おにいちゃん、悩み事？」

「あ、いや、ほら、これから新しい学校に行くわけだしね、色々あるんだよ」

「そう………？」

なんて話しているうちに、味噌汁が吹きこぼれて大きな音をたてて煙が上がる。

「うわぁー！」

「おにいちゃん！危ない！」

考え込みすぎて今自分が料理を作っている事を忘れていた。それ

に加え、焼き魚はほのかが気付かなければ炭になっていたし。ご飯もといた米をそのままに、空の炊飯器に水だけ入れてスイッチを入れていた。

結局、焼き魚にトーストという和洋折衷 - - 前向きに捉えて - - の朝食を済ませ、学校へ向かった。

「というわけで、結構真剣に悩んでるんだよ」

「「はあ…」」

なかなかいい案が思いつかなかった僕は、学校で達也と貴理華に意見を求めていた。家の事情がある程度知ってる2人なら話せると思ったのだ。

「真ん家の事情は知ってるから真剣な悩みなのはわかるけどさ」

「それ傍から見たらただのファザコンとシスコンに捉えられかねないわよ？」

「シスコン……」

「ほのかちゃんもある意味ブラコンに近いような気がするけど」

たしかに2人で生活しなければいけないという環境は、兄妹愛を強める事になったかもしれないが。

「まあウチの事情だし2人に相談してもね、悪かったよ」

「ちよ、待った、そんなつもりじゃないって」

「ただあんまり人前で話すと誤解を産むって言いたいだけよ」

実を言えば、良い案が返って来るとは期待してなかった、人に話して少しでも楽になりたかったただけだ。それにほのかの為にと意気込んでいる今、シスコンなら褒め言葉として受け取れる――気がする――。

「んで結局どっかで話さなきゃいけないんだろ」

「隠し通せたとしても元の帰国予定の10日後にはわかるし」

「早めに言わないとなんで隠してたの？ってなっちゃうんじゃない？」

2人の意見は隠さずありのまま話してあげた方がいいという形にまとまった。

8話 伝える決心が出来ました

放課後、今日は授業に関する事等の説明があつたはずだが、あまり耳に入つてなかつた。

避ける事が出来ないなら先延ばしにするより早く片付けてしまつた方がいいだろう。と結論付け、今夜、正直に父の事話してしまおうと決めた。だがそれでもどう切り出そうかとかどう説明しようかなど考えてしまふ。

朝食の件といい、僕は1度悩んでしまふと他の事に手がつかなくなつてしまふ性質のようだ。今も、早くも校内の有名人となりつつある人物が机の前にいるにもかかわらず、話しかけられるまで気付かなかつた。

「藤田君、随分お悩みのようね」

「え、そう見えますか？」

「ずっと何か思い悩んでるように見えるわ、朝も声をかけたけど気がつかなくなつたようだし」

声をかけてきたのは霧島さんだつた。今日も笑顔振りまくその姿は、上級生の間でも噂されているとかないとか。

どうやら一度話しかけられたのに気付かなかつたようだ。それほど周りが見えていないのか僕は。

「それはすいません、どうやら僕は周りが見えなくなつてしまふタイプのようです」

「いいのよ、それより、藤田君をそこまで追い込む悩みを私にもお

聞かせ願えないかしら？」

話しづらい事だったらしいのだけど、と一言添えて彼女は聞いてきた。話しづらいわけではないが、我が家の家庭事情を一から説明するのはさすがに面倒だし、あまり長々と話されても向こうが迷惑だろう。少し考え。僕は。3ヶ月父が海外から帰らない事、その事を僕だけが知り妹は知らない事、その3ヶ月の間僕と妹だけで生活していく事。それらを、いつ、どう伝えるか悩んでいる事を話した。彼女はそれを追いつちを打ちながらも黙って聞いてくれた。真剣な面持ちで考え込んだように見えたがすぐにいつもの笑顔になった。

「私はそんな長期的に家族が離れることもなかったし、兄弟もいないからどうかはわからないけど」

彼女はちよつと申し訳なさそうな顔をしていたが、相変わらず笑顔を崩していない。

「少なくともお父様がいない間は妹さんが頼れるのは藤田君しかないのだから、隠し事をするなんていう信頼を裏切るような事は避けた方がいいんじゃないかしら」

結果としては達也と貴理華と同意見だったが、ここまで真剣に答えてくれるとは思わなかった。こういうところが彼女の人徳を創り上げていくんだろうな。

「貴重な意見をありがとうございます、おかげで伝える決心が出来ました」

「そう、力になれてなによりだわ」

改めて礼を言いつつ、彼女に別れを告げた。

余談だが、すでに霧島さんはクラスの有名人と化している。そんな彼女と僕の会話に聞き耳を立てていたクラスメイト達から僕は、彼女に好意を寄せ、嫉妬に燃える男子勢からはシスコン野郎と。他、主に女子勢からは妹思いなんだという評価をされていた。もともと、僕がこの事を知るのは先の話になるのだが。

9話 大切な話がある

今日、ほのかは始業式で、久しぶりに友達と遊ぶから遅くなると連絡受けている。話をするなら夕飯後くらいがいいだろうと考えていたので、早く帰るよう促す事はしなかった。

家事と買い物を済ませ、ほのかの帰りを待った。

「ただいまあゝ」

「おかえり」

午後7時半、遅くなると言っていたので妥当な時間だ。

我が家では門限を午後6時とし、それを超過する場合にはかならず連絡を入れるという事になっている。門限は帰宅時間を縛るものではなく、それまでに連絡を入れる基準としたものだ。また、分かる範囲で帰れる時間も連絡しておくというのもある。

ほのかはちゃんとこのいつけを守ってくれてるし、今日も7時半ぐらいと聞いている。おかげでほのかに帰りに合わせて夕飯を用意しておく事が出来た。

「なんか今朝はすごいおにちゃんらしくない失敗ばかりだったけど大丈夫？」

「もう大丈夫、夕飯の出来は心配しなくてもいい」

「そこは心配してないよ」

朝は確認する余裕がなかったけど、ほのかはいつもの調子を取り

戻っていた。お互い学校であった事話したり、テレビ番組を見ながらそれを話題にしたりと、いつもの明るい食卓に戻った。

だがやはり言わないわけにはいかない。言えばまた落ち込むだろう、むしろ普段より一層落ち込むだろう。いつもなら僕らの事を考え、長くとも2週間程度で帰ってきてくれたが、今回はかなり期間が長い。

ほのかに風呂に入るように促し、その間に夕飯で使った食器を洗う。ここまでではいつも通り。

「ほのか、話があるからおいで」

風呂上がりのほのかを呼びとめ、食事の時に使うテーブルとは別に置かれているソファーに座り、隣にほのかを座らせる。面と向かって話すよりは楽な気がしたからだ。バラエティ番組を映すテレビは消そうと思ったが、少しでも気を紛らわせればとつけたままにしておいた。

改まった雰囲気を感じ取ったのか、ほのかが疑問符を浮かべている。

「大切な話がある」

「うん」

父から聞かされた事をありのまま話し、伝えるのが少し遅れた事を謝った。

話す間、頷いてはいたがずっと黙りこんだままで、話し終えてもしばらくだんまりだった。1人にしてあげようかと思ったその時、ほのか力が抜けたようにこちらに倒れてくる。膝上にほのかの頭を抱えるような体勢になり、立ち上がれなくなる。

「しばらくこのままでもいい？」

震える声で懇願するその表情は、背をこちらに向けているので見ることは出来なかった。

「うん、いいよ」

そう言いながら頭を撫でてやった。

甘える妹を拒絶出来ず、とりあえず気のすむまで好きにさせてやることにした。

10話 いつもよりいい出来かな

今日はいつもより1時間ほど早く起きた。ほのかが部活で早くから行かなければならぬらしいので、朝食を作る僕もそれに合わせて起きなければならぬかった。それに、今日から午後も授業があるので、朝食とは別に自分の為の弁当も作らなくてはならない。

一応学食があるらしいのだが、弁当にした方が安上がりなので多少面倒だが作る事にした。毎日の事だしこういところの節約は後々大きな効果が出てくるものだ。

今日の朝食は。ボイルしたウィンナー、付け合わせにスクランブルエッグと刻んだキャベツにプチトマト。あとはトーストとコンソメスープ。見た目では判別し辛いですが、調理に関してもいつもより手が込んでいます。

料理人という程のプライドはないが、我が家の食卓を預かる者として昨日のアレは許せる物ではなかった。そこまで深く意識していたわけではないが気付くと凝った品々が出来あがっていた。

「おお、なんか今日の朝ごはんはリッチかも」

「ん〜、まあ昨日のお詫びとでも思っておいて」

見た目もそれっぽく盛りつけられた料理を見て、ほのかも感嘆の声を上げる。母お手製ブレンドの紅茶を淹れ、食べはじめた。

「わあ、なんかいつもよりおいしい」

「自分で言うのもなんだけどいつもよりいい出来かな」

昨日の失敗を払拭する意味でも今日出来は上々だろう。ほのかもお気に召したようだなによりだ。

「ごちそうさま、それじゃいってきまあす」

「いってらっしゃい」

昨日の事を懸念していたが、ほのかもある程度心構えが出来ていたようで、立ち直りは早かった。心配は無用だったようで、ほのかはいつものように明るさ全開で飛び出していった。

送り出した時にはまだ時間があつたので新聞を読んでいたが、ふと時計に目をやるとそろそろ出ないといけない時間になっている。

戸締りが完璧である事を確認し、家を出ると、そこには何故か霧島さんがいた。

10話 いつもよりいい出来かな（後書き）

シスコン編終了です。次からはやっとヒロインが絡んでくる……予定です。

11話 なるほど。嫉妬か（前書き）

登場人物の容姿に全く触れていないと指摘されたので少し修正しました、それとこのままタイトルつけていくといつか詰みそうな予感がしたので各話の台詞から抜くことにしました。

11話 なるほど。嫉妬か

「おはよう藤田君」

「おはようございます」

事態が呑み込めなかったが、とりあえず挨拶を返す。

にこやかに笑顔を向ける彼女に、僕は素直な疑問をぶつけてみた。

「なぜここに？」

「なぜって通り道だから。たまたま貴方が出てきたから声をかけたのよ」

彼女の立ち位置を見る限りは通りすがりより待っていたの方がしっくりくるのは気のせいだろうか。

「よかつたら一緒に登校しない？」

「構いませんよ」

彼女に誘われて断れる男性はそういないだろう。この流れになる事は予想していたがそれでも少し動揺している、普段の口調を崩さず話せた自分をほめたいところだ。
程なく僕は並んで歩きだした。

「いつもこのぐらいの時間なの？」

「そうですね、朝早く行く事情もないですし」

あまり接点のなかった霧島さんだったが、話せばやはり彼女も普通の高校生なのだなと思つた。しばらくは他愛の会話を楽しんでいたが、学校に徐々に近づき始めてからはどうも変だ。

どうにも落ち着かない。今歩いてるこの道は、入学前からも何度も通つた事のある道のはずだ。なのに、僕は全く知らない道を、地図も案内もなしに歩かされているような気分になつた。さっきまで楽しんでいたはずの他愛のないはずの会話も、息苦しい。一言発する度に深呼吸をしたくなる。

なんだこの強烈な圧迫感は。

ふと振り向くと、僕は同じ学校の生徒――主に男子学生――の注目を集めている事に気付いた。

「なるほど。嫉妬か」

「え？なにか言つた？」

「いえ、なんでもありませんよ」

既に校門が見えるところまで来ている、今更言い訳を考えて離れるのも不自然過ぎるだろう。早々にあきらめた僕は、それだけで人を殺せそうな視線に耐えつつ、教室へ向かつた。

12話 羨ましい限りですね

昇降口でお手洗いに行つてきますと無理やりに彼女と別れた僕は、10分ほど鏡とにらめっこしてから教室に向かった。これほど間隔を空けておけば大丈夫だろうと席に着いた瞬間、2人のクラスメイトに包囲された。実質2人では包囲とは呼べないが、その剣幕で迫るそれは包囲と読んでも過言ではなかった。

「藤田君、少しばかり聞きたい事があるんだけどいいかな？」

「はい、なんでしょうか？」

「今朝霧島さんと一緒に登校してたそうだけど、君たち一体どういう関係なの？」

正面から尋問しているのが市原、僕の後ろで退路を塞いでいるのは稲垣。昨日少し話したただだったが、ほんの二言三言話しただけでも、2人が熱烈な霧島さんのファンである事がすぐにわかった。恐らく噂を聞きつけ確認しに来たといったところだろうか。

「通学路が同じだったようでけさたまたま会ったので、そのまま一緒にいただけです」

「そうなの？」

「そうです、なので君らが懸念しているような事はないですよ」

「なんだ、よかった。安心したよ」

大軍に包囲されたような錯覚さえ起こさせるような雰囲気が一気に消え失せる。誤解は解けたようだ。

初日からすでに、霧島さんの事しか話してないような気がするこの2人。当然僕と話す内容も彼女に関わる事しかないわけだが。

「やっぱり霧島さんみたいなかわいい人を彼女にしたいと思う?」

「そうですね、彼女ほどの方を連れまわせるような男がいるなら、羨ましい限りですね」

これは本音である。

「ただ、恋人になったと同時に命の危険がありそうで怖いですね」

これも偽らざる本音である。この2人のように嫉妬に燃える輩がどれだけいるか、見当もつかない。

その後も、霧島さん満載の会話が繰り広げられようとしていたが、佐伯先生が教室に入ってきたことで、僕はようやく2人から解放された。

13話 授業は好きになれそうにない

今日は全時限授業だが初回だったので。教材の配布と、その科目を担当する先生の自己紹介、そしてその科目の軽い説明程度しかなかった。僕は勉強が出来る出来ない以前に嫌いなので、説明だけとはいえ、これから先やらなければならぬ教科書の中身を見るだけでも辟易としていた。

この学校では、午前中に3時限、午後に2時限で最長5時限までとなる。そして今2時限目が終了したところ。次を乗り切れば昼休みに入って一息つける。

時間割を確認すると、次は英語。英語は嫌いだ、言ってしまうば全教科嫌いとも言えるのだが。中でも特に英語はだめだ。

チャイムが鳴ると同時、先生が教室に現れ、授業が始まる。先生は遠藤進と名乗り、さっきまでの授業までと変わらず教材の配布と説明を始めた。このまま終わるかなと思っていて、先生が予習しておこうと、席順で教科書の中を読ませ始めた。さっそくか。

「次、藤田君」

「はい」

立ち上がり、ちょっとささやかなさそうに英文を読みあげると、先生は怪訝な顔をして僕を見た。

「同じところを君なりに自然に読んでみなさい」

「はい………？」

もしかして気付いた？もう一度、読み上げる。今度は僕が使える言い回しで。周りでみんなが首をかしげているのがわかる、知っているのは達也と貴理華くらいじゃないだろうか。

「やっぱりね、君はイギリス英語は話せるんだね」

「はい、そうなんです」

よく気付きましたね、と言いかけたが、さすがに失礼と思ったので言えなかった。中学では教科書の内容通りにしか授業が行われなかった。おかげで発音がおかしいだのなんだのよく言われていた、だから余計に嫌いなのだ。

「先生、イギリス英語ってなんですか？」

クラスの誰かが言った。

そもそも英語はイギリスのイングランド地方発祥の言葉であり。名のままの通り、イギリスの漢字表記に由来し、「英吉利」の「言語」で「英語」。僕はイギリスに縁があるので使う機会も多い。しかし日本で教えられている英語というのはアメリカ式と呼ばれるものであり、僕の知っているイギリス式とはちよつと違う。それに僕は日常会話程度には話せるものの、文法とかその辺を理解して使っているわけではないので、余計に混ざつてこんがらがってしまったのだ。きちんと英語に関する知識を持っている人であれば知っているなものだが、残念ながら中学校で担当していた教師にはそれがなかった。それに中学校で使われる教科書にそんな内容が書いてあった覚えはない、自主的に調べない限りは知らなくて当然だろう。

ちよつと先生のイギリス式とアメリカ式の講義が終わった。

「……というわけでちよつと違うんだ。このクラスは恵まれてるな、

イギリス式と比較出来る人材がいて」

いい教材ができたと言わんばかりの笑顔で、僕を見つめる。目で
お断りします、と訴えるが効果はなさそうだ。

やっぱり英語の授業は好きになれそうにない。

13話 授業は好きになれそうにない(後書き)

設定上、主人公はイギリスに縁があるので話せる設定にしたかったのですが。調べればイギリス式ってなんですか？って状態で。一応調べはしたものの、正直いいますと、きちんと調べきれている自信はないので。今後の展開に矛盾が生じる事もあると思いますが、そこは見逃していただけるとありがたいです。

14話 よそを当たってもらえませんか？

昼休み、僕は鞆から弁当を取り出して食堂へ向かった。達也と貴理華が弁当ではなく学食だからだ。

この学校では、食堂への弁当の持ち込みが許可されている。なので、僕らのようにグループの中で弁当と学食で別れても、一緒に食べる事が出来る。詰めて座ったら全校生徒を全員収容出来るのではないか？という程大きいこの食堂が無ければ、そんな許可は下りなかっただろうが。

僕が席を確保する間、2人はランチを買いにいった。食堂の席は長方形のテーブルで、左右に長方形のイスが固定されたものが一定間隔で並び、それが何列も並んでいるというような感じ。1つ1つのテーブルは、4人くらいで使うのが丁度いいくらいの大きさ、少し手狭になるが6人でも問題はないだろうか。まだ誰も座っていないテーブルを見つけ、腰を下ろした。まだ会って3日の他人を脱しきれない仲で、無理に席に座って来るような図々しい人間は…

「藤田くん、隣いいかな？」

「ここ使っていい？」

疑問形で問いかけてきたにも関わらず、その声の主達はすでに腰を落ち着け、今まさに食べる寸前まできている。それがこれから仲良くなるための交流であれば何も文句などないのだが。2人からはそんなフレンドリーは雰囲気は感じ取れない、それに達也と貴理華が来るので1人あふれてしまう。

「ちょっと人と約束があって席をとっているので、今日はよそを当

たつてもらえませんか？」

「え〜！？」

不満な声を漏らす2人は、すでに食事を始めていた。1回で聞き入れてくれればいいものを、何度説明しても一向に立とうとしない2人に、さすがにイラツときましたよ？結局動こうとしない2人に呆れ、少し離れた空いた席に向かった。市原君、稲垣君、どうやら僕の中での君達の評価を改める必要があるようだ。そう心の中で呟き、彼らの評価を大幅に下降修正させた。

「あれ？なんかさつき見た時と場所変わってる？」

「うんまあ、色々あってね」

食堂の中の席はだいぶ埋まっていた。たしかに全校生徒を収容出来るかも知れないこの食堂は広いが、さっきの2人や僕らのように4人揃って座ってるグループばかりでない。この調子だともう席は全部埋まってしまうだろう。今年度最初のお昼だし、他の学年も大勢来てるのだろうか。さきほど2人が無理に座ってきたのも多少納得がいった。同じ事をしようとは思わないが。

程なく席は埋まり、空いた席を探し彷徨う生徒が目立ってきた。早めに食べてしまつて席を譲つてあげるべきかな。そんな事を考えていたら、何人かに追われるように席を探す人影を見つけた。霧島さんだ。気付けば彼女の動きを目で追っていた。言い寄る男子生徒に断りを入れているが、次から次へとやってくるので去なしきれていない、さすがに困っているようだ。ふと、目が合った。嫌な予感がする。弁当を持って逃走しようかとするが、振り向けば…

「空いてる場所がないの、こゝ一緒にいいかしら？」

お詫びとか報告とか色々

2011/11/25

この作品は作者の友人達の酷評により成り立っているのですが。

タイトルが意味不明

これはない

などとボロクソに言われまして、あとから「ごちゃごちゃいじるは嫌
でしたがタイトルを変えることにしました。

平凡すぎるかなとも思いましたが、まだましじゃない？との意見な
ので採用。

今後も

「どや！」

「ボツ！」

「ほあ！」

となると思っているので「容赦下さい」。

今後何かあればこの場所に書いていく形にしよつと思っております。

15話 アレに比べたら

4人掛けのテーブルに僕、正面に達也、その隣に貴理華、そして空いてるのは僕の隣。

嫌なんて事は全くないんだ。むしろこれだけ可愛い子と一緒に過ごせるというのは、男として誰もが羨む展開だろう、僕もそう考える1人だ。だけど、朝も感じたこの嫉妬の視線。この視線を浴びた中で食事をするというのがどれほど辛いものか。食事が喉を通らないうってこれですか？

「藤田君はお弁当なのね」

霧島さんは抱えていたトレーをテーブルに置き、そのまま僕の隣に座る。あ、今殺気が何割か増して飛んできた。

「真はそれ自分で作ってだってさ」

「へえ、自作なんだ」

物珍しそうな目で僕の弁当を覗き込みながら言う。食べかけのを見られるのもなんだか嫌なんです。

「私料理は全然出来ないから憧れるわ」

「人に憧れられる程の腕はないんですけどね」

話を聞いてみれば、評判ではパーフェクト超人の彼女も料理は苦手みたいだ。そういえば中学生の時にあった調理実習で、皮どころ

か実まで剥かれた野菜ばかりを生み出し、最後は指を3回くらい切
って保健室に向かったという事があったな。繊細に見えて意外と不
器用なのかもしれない。

「あたしも自分で作ろうかな」

「お前はやめとけて」

「どーして?」

「達也の言うとおり、貴理華に使われる食材が可哀想だよ」

「あたしには可哀想だと思わないの!?!」

彼女の手から生み出される暗黒物質

ダークマター

は常人には危険過ぎる。以前頼まれて教えようとした時期があつた
が、何故か彼女の手が入った瞬間から食材達が闇に侵されるのだ。
あれには絶望すら覚えた。

「ていうか達也も料理出来ないじゃない、あんたに言われる筋合い
はないわ」

「少なくともお前の人類史上最悪の料理に比べたらマシだよ」

「達也の料理もなかなか前衛的だと思うんだけど」

貴理華に比べたらマシだが、人の事を言える立場ではないのも確
かだ。

「話を聞く限り、2人よりは私の方が才能ありそうね」

「アレに比べたら自信を持っていいと思いますよ」

「「ヒドイ!」「」

食事が終わりみんなは食器を戻さなければならぬので、僕は足先に教室に戻る事にした。そう思って席を立った瞬間、背後で隠されていた殺気が一気に膨れ上がる。

「やあ藤田君」

「「」機嫌麗しゅう」

「「」ちよつといいかな?」「」

僕は市原君と稲垣君に拉致された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3984y/>

僕の日常

2011年12月17日07時56分発行